



もど子と人婦

號參第卷六第

もど子

ダイヤモンドと蛙

倭翁

五十子さんと、雪子さんとは姉妹でしたが、どうしたのですか、五十子さんは、小さい時分から、意地悪で我儘で、自分よりか年下の雪子さんを、苛めることな

ども度々でした。

夫ですから、近所の人達も、誰だって、五十子さんを可愛がるものはありませんで、皆雪子さん雪子さんといって、雪子さん許りを可愛がってくれました。

今日も、おっ母さんが、五十子さんに、

「五十子や、お前向ふの井戸へ行って水を一杯汲んできておくれ」といひつけますと、五十子さんは、

「はい、たゞ今」

といって、手桶をさげて門口まできました。が、そこまできてから、そっと、雪子さんを召んできて

「雪さん、雪さん、あのおっ母さんが言ひましたよ、雪さん行っ

て水を汲んでき

なさいって」

といひますと、

雪子さんは柔順

ですから、

「あら、姉さん、

そうでしたか」

と、いって、大急

ぎで手桶を五十

子さんから貰っ

てかけて行きま



青木

した。すると、

五十子さんは

「水なんか、私

汲まないわ、こ

んな事は雪さ

んにさせれば

いよのたもの

と獨り言を言

ひながら、此

方の方へ来て

横になつたな

り繪本など見て遊んで居ました。

で、雪子さんは井戸へ行つて、一生懸命になつて水を汲んで居ますと、そこへ、一人の汚い乞食の様な老婆さんがやつて参りまして、

「もしく、どうか其水を一杯私に飲ましてくれませんか」と申します。雪子さんは、誰にでも親切なよい娘ですから、

「まあ、澤山お上り、今汲んであげるから」

といつて又一杯奇麗な水を汲んで、夫をお老婆さんのさし出したお碗に入れてやりました所が、お老婆さんは、

「やれくありがたうございます」。

といつて、甘相に、ぐいぐいと飲みました。で、雪子さんは始か

ら、このお老婆さんを汚い乞食見たいなお老婆さんだと思つて居たのですが、眞實は、これは乞食ではなくって、神様であつたのです、神様が、こんな風に態と變つてきて、雪子さんが、どんなによい娘であるかといふのをお試しなされたのでした。それですから、お仕舞に、お老婆さんのいふには、

「あゝ雪さんや、お前さんはこんな汚い貧乞婆にまで、そんなによくしてくれたから、私もお前さんに御褒美をあげる事にしよう。で、お前さんがいつでも親切な言を言った時は、其度に、お前さんの口から、ダイヤモンドだの眞珠が飛びだしてくることにして上げよう」。

雪子さんは、これを聞いて、まあ不思議なことをいふお老婆さん

だことゝ思つて、ひよいと見ると、もう何處へ行つたか見えませ  
 んでした。

夫から、水の手桶を提げて、家へ歸つて参りますと、おつ母さん  
 は、雪子さんが水を汲みに行つたことは知りませんで、やっぱり  
 何處かに遊んでゐるのだと思つて、さつきから探して居た所でした  
 から、今雪子さんが水を提げてきたのを見て、

「おや、雪さん、お前水を汲んできたのですか、五十さんに言ひ  
 つけたのだのに、五十さんはどうしたんだらう、」

といつて、とうく五十子さんの遊んでゐるのを見付けて、又、い  
 つもの様に、五十子さんが、ズルをして、年下の雪子さんを使つ  
 たのだなと思つて、五十子さんを叱りにかゝらうとしますと、雪

子さんはすぐ姉さんをかばって、

「あのね、おつ母さん、五十子さんがさつき汲みに出様としたのを、私代って上げたのよ、」

といひだしますと、不思議じゃありませんか、雪子さんの口から、ダイヤモンドだの、眞珠などが、幾つもく飛びだしてきました。之を見て、五十子さんもおつ母さんも吃驚しました。で、雪子さんは、さつき井戸側でお老婆さんのいったことをお話しますと、五十子さんは、じつと夫を聞いて、

「それじゃ、明日は私が屹度汲みに行ってよ、」

といつて居ましたが、夫から明日になりますと、誰もいはない中に、五十子さんは獨りで、一番大きな手桶を下げて家を出ました。

然し、其手桶が中々重いので、五十子さんは引きずり、引きずり提げて行きました。が、一體が我儘ですから、もう肝癢がおこつておこつて堪らなくなりまして、で、

やつと井戸側まで

行つて、荒っぽく、

ガチヤンくさせ

て釣瓶から水を汲

んで居ますと、そ

子さんは、手桶が重くつて、

腹がたつてならない所へ、お老婆さ

んでなく、乞食老爺さんが出てきたもんですから、一層腹がたつ



こへ一人の汚いく  
お老爺さんがやつて  
來まして

「お嬢さま、どうぞ  
私に其水を一杯のま  
してくれませんか」  
といひました、五十



て

「知らないよ、誰がお前見たいな乞食に水を上げるもんか、お前に飲ませようと思つて、こゝまで重い目して水汲みにきたのじゃないよ、飲みたけりや、一人で勝手にくんでおのみ、

といつてやりました。所が、この乞食老爺さんといふのは、やっぱり神様で、前のお老婆さんの代はりに今度はお老爺さんになつてきたのでした。夫で、今五十子さんの言ふのを聞いて、

「あゝ、お前さんは眞實に意地悪だ、これから柔順で、親切な娘になるまでは、お前さんの物言ふ度に、口から蛙を出してあげよう」

といつたまゝ、又何處かへ消えて行きました。

で、五十子さんは家へ歸つて、おつ母さんに、其事をお話しよう  
 とすると、口からしてびょんくびょんくと何疋もく蛙が飛  
 び出してきます。おつ母さんはいふまでもなく、雪子さんも、吃  
 驚して、いろくして見ましたが、五十子さんの意地悪と我儘が  
 なほりませんので、いつもく蛙が飛び出してきてゐました。け  
 れども、とうくお仕舞には、五十子さんも、あんまり苛くなくて  
 参りましたと見えて、餘計な我儘も言はない様になり、夫から意  
 地悪も直つてとうく雪子さんの様な柔順なよい娘になりました  
 のでやつと、蛙の飛び出るのがやまりましたとさ

めでたしく。